

大杉は大きかつた

和田榮太郎

□

大杉の著書「悪戯」の序文に「悪戯の中に本氣を見出し「くれ」といふ事がある。

一體、大杉といふ人はかなりな茶目だつたやうだ。そしてその悪戯なり、茶目なりが普通の茶目や悪戯に終る場合もあつたらうけれども、何時の間にか大杉の所謂「本氣」になつてしまふ場合の方が多かつた。だから、大杉を攻撃する連中に取つては絶好の口實を與へるやうな事もあつた。

大杉のこの性格の中から「本氣」を見出す事の出来なかつた連中を代表するものは有田ドラツク級であり、本氣を見出して常に戦々恟々としてゐたものは日本の軍閥だ。

之れに反して、大杉の「悪戯の中に本氣」のある事を見出しながら、又は見出さうとはせず、所謂「悪戯」を「悪戯」

として取扱ひ唯一の攻撃の材料にしてゐたものがある。それが日本のボルセキキの一派（總同盟及び普選屋を含む）だ。

此の連中の大杉に對するや、恰も彼の水鳥の羽音に驚いて潰走した平氏の觀がある。例へば僕等が、何か運動を計畫したり、會合でも催さうものなら、そしてそれが反ボルセキキの事でもあると、彼等は口を揃へ筆を揃へて、「之れ大杉の指金なり」つてな事を云つて當もなく駈けすり廻るか、又は讒誣中傷に日も維れ足らずといふ有様だ。

有田ドラツクは大杉を攻撃して藥を賣り、日本のボルセキキは「流弾」を發行して大杉に喧嘩を吹き掛け却つて内輪喧嘩を爲す。伶俐者はそれ有田ドラツク乎。

□

去年の暮だつた。大杉と一緒に江東方面のある組合の集合

へ行つた。大杉の話が一先づ済んだので時計を見ると十時だつた。歸らうと思つてゐると組合員の一人が突然に「大杉さんはなかなか色男ですね」といふ奇問をした。流石の大杉もこれには一寸參つたらしかつたが、非常な熱心さを以て戀愛の話を始めた。歸途、組合の人が七八人で向島の土手まで送つてくれて、「今夜は非常に氣持が好かつた。」と云つた。大杉は「僕も氣持が好かつた」と云つた。そこで氣持の好い同志で居酒屋で一杯やらうと誘はれたが後日を約して赤電車で歸つた事があつた。後でその組合の人に逢つた時にその人は「此間の戀愛の話を聞いて自由聯合の精神がハッキリした」といふやうな事を云つてゐた。

神田の青年會館邊りの演説會で吃りながら猛烈な彌次を飛ばしてゐる時だつて、一寸見ると駄々ツ子のやうだ。しかしその彌次が單なる惡戯から來てゐるものでない事は、最初に大杉の彌次に對して應酬してゐた聴衆が何時の間にか大杉の彌次に共鳴してしまふのも分る。賀川豊彦や、福田徳三を彌次つた時の光景がそれだ。

さうかと云つて大杉の運動が凡て惡戯や茶目氣分に出發してゐるといふ見方は、日本のボルセキキ的の見方だ。一體大

杉といふ人は知識階級といふ環境から出た人間に似合はない「摺れからし」だ。即ち「苦勞人」だ。何んな贅澤も知つてゐたやうだし、何んな貧乏にも堪へ得る人だ。凡ゆる苦楚を嘗めた人のみが體得し得る用意が何時も腹の中にあつたやうだ。「徹底」といふ事が大杉の運動の凡てだ。如何に尤もらしい理論でも、甘さうな話でも大杉をゴマ化す事は絶対に出来なかつた。

その學殖、鋭い觀察、勇敢等、之等のものを個々にいふならば、或ひは大杉以上の人間を求むる事はそんなに至難な事ではないかも知れぬ。しかし、之等のものを併せ有し、加ふるに剃刀の如き鋭さと縦横の機智とを備へ、淺薄な知識階級的「誇り」の臭みを脱却した點に於て第二の大杉を求むる事は至難な事であらう。

兎に角大杉は大きかつた。何處が大きいかと云はれても張りたゞ大きかつたと答へる外はないが兎に角大きかつた。大杉の存在はそれだけで大きな示威であつた。

頑張り屋だつた大杉

望 月 桂

い筈だが……」と一人が云つた。

「お互ひだが、餘り落ちつき過ぎてゐるよ。こんな時にはさつさと行衛をくらまして了へばいいのに……。」と追つかぬ愚痴をこぼすものもあつた。

「いや、もうこれからは何んでも捨身でかかるに限る。動きのとれるうちだ。何時やられても心残りのない迄でにやらなくちや。」と大いに悟る者もあつた。

何としても杉の死は、だまし打ちにされたと思ふと殘念でたまらぬが、今までに幾度も生死の境をさまよつた中では、最も質のいいものとあきらめるより仕方がない。

「杉」の死に就いて窒息するやうな思ひで語り合つた。「この間、看守が讀んでゐた新聞を盗み見た時、戒嚴司令官や憲兵隊長が不法行爲で免官になつたと載つてゐたが、なぜだか、どうもそれが大杉と關係があるやうな氣がして仕様がなかつたんだ。だが、心配になればなる程、何だか其の眞相に觸れるのが恐ろしかつたので、そんな事があるものかと自分で打ち消してゐたんだが……。」と一人が云つた。

俺が杉と初めて知つたのは、奴が日蔭の茶屋の傷もまだ生ま生ましく、本郷の菊富士ホテルの二階に野枝さんとムグつてゐた時、久板に案内されて逢つたのだ。彼れの勇敢な直接

行動は、只だに謂ゆる社會運動の上へのみ現はすのではなく、彼れの戀愛に於てもまた然りで、葉山事件はその崇りだつたんだ。當時は、社會運動者達の新人だのと云つても野暮連が多かつたと見え、同志の中でも出入する者は二三人しかなかつたさうだ。そのせいであつたか、馬鹿に人懐っこさうに話し込まれたので、遂ひちよいちよい往き來するやうになつたが、杉は一體あまり個人的に親しみを待つ友達が少なかつたやうだ。それと云ふのも矢張り、坊つちやん式の我儘が人と折合はなかつたのかも知れぬ。だが、僕にはそこが自分も似た性分のせいだ、それが最貴目に見たくなり、素直な感情的なところが氣に入つたものだ。

それでも時には、彼れの有る力にまかせての、悪意や計劃的でないにしても、また仕事に餘り焦燥に過ぎるためだとは思ひながらも、人を壓するまでに專制的に擧つたり、いやに高慢な風をする時は、癢に觸つた。こんな時ウンと逆襲すれば、最近では寄る年波と云ふ程でもないが、すれたせいか角もとれて、眉根を八字に垂れ、戯談まぎれに高慢ちきな鼻を引込ますまでに折れて來た。それでも奴が、小供に對する目尻の傾きに比しては遠く及ばず、また女に對する喉の管が遠

ふだらうと思はれる程の優しい聲色に較べると、數段の差を見る。

何としても、その可愛氣を呑み込んでゐるものには、世間から暴力の權化、惡魔のやうに呪はれてゐる不逞イ奴とは思ひもよらぬいい物知りだ、仲間として心強い同志だ、と敬愛されてゐた。

また時には、大杉は贅澤だと叱る者もあつたが、それも奴がケチに溜め込んだり、貧的を捧つたりして我儘三昧をやつた譯ではない。腕にまかせて原稿科が入つた時か、木屋の親爺から前借の仕方題をやつてのけ、したい事を正直にやる利那主義の實行者だつたと云ふだけだ。

これは決して、御驅走にぶつかつたから庇ふと云ふ義理合ひではないが、大杉が龜戸の細民窟にドン底生活をしてゐた頃だ。奴は三人の來客を歡待するために、無けなしの壽の底を意勢よくはたい握り壽司に換えて了つた。

その内に、南側の日當で犬に顔中ペロペロ甜められながら守りされてゐた、まだ腹逼ひも出來ぬ赤ん坊が泣き出した。牛乳を朝からやるのを忘れてゐたのだと云ふのだ。それでも

夫婦とも早速やらうともしない。子供のミルク代までが壽司に化けて了つたのだと云ふ事は、後で當時の居候久板の口からばれた。その赤ん坊と云ふのは、その頃まだ天に地にも一粒種の、親父にとつては目の中へナリ込んでしまいたい程に可愛い魔子だつたんだ。

それから、俺達仲間には随分理屈屋が多いが、さて動く段となると却々理屈通り動かす、はづんだが最後、とめどもなく調子づくると云ふ連中だ。大杉とても其の類に漏れない一人で、自ら藝術味ありと稱してゐた。獨創的だと云つてゐた。

かつて曙町の家に行つた時、壁にフクロウか狸の面のやうな、自畫像とも思はれるが自らは猫だと云ふものが筆太にぬたくつてあるのに氣づき、大杉は繪も描かせれば描く男だと思ひ、黒耀會の展覽會の時にウンとおだて揚げたら、これが民衆藝術の見本だ、商賣人には批評は出來まいと力んで、二三度も説明を要する自畫像を描いた。これは一つには、俺には畫なんか描けぬえ、私なんぞには繪なんかとても駄目ですなぞと、てんで試さうともしない迄でにいちげた民衆の氣力を鞭撻する積りで、彼がいつも試みる方法であると同時に

出來ない事があるもんかと云ふ強情と、地金の冒險性との合作だつたんだ。

そこで今度は展覽會を開くに就いても、俺などは無審査を主張したが、奴は「藝術がどんなもんだかてんで解らぬ者もあるし、感違ひしてゐる者もあるから、有島(武郎)君でも立會人にして、嚴選！嚴選！」と頑張つて承知しない。有島君は都合が悪くて來なかつたが「モン文句を云ふ奴があつたら俺が一人で引受ける」と固い信念をもつたらしく、大手を擴げて矢面につつ立つた様に我を押し通すので、居合せた林(俊衛)君が中をとつてどうにかまとまつた。

大杉は萬人の自由をみとめるが、多數決のデモクラシーではなく、「結局力の問題だ」と云ふ事を繰返し繰返し口にした事も思ひ當る。

ヤツも吃りながらもヨク大眼玉をパチクリさせながら、惡口をたたく奴だつたから、お經の代りにウンと惡口でも書いてやらうかと思つては見たが、相手が無口になつては、受け答へがないので張合ひもぬけ、只だ心淋しいばかりとなつて、いやに月並な思ひ出になつてしまつた。